

Childhood Chronic Idiopathic Uveitis in a Multicenter International Cohort

小児慢性特発性ぶどう膜炎の多施設国際研究

Maccora I, Guly C, de Libero C, Caputo R, Ramanan AV, Simonini G.

Ocul Immunol Inflamm. 2024;32(3):310-319.

PMID: 36802984 DOI: 10.1080/09273948.2023.2169715

小児のぶどう膜炎として JIA 関連ぶどう膜炎がよく知られているが、4-5 割は原因がわからず特発性である。この論文では、イタリアとイギリスの二施設で国際共同研究を行い、小児慢性特発性ぶどう膜炎 126 例 232 眼の臨床的特徴を調べた結果が報告されています。平均 9.3 歳で診断されており、両眼性が約 8 割、前部ぶどう膜炎が約半数であり、初診時の平均 LogMAR 視力は 0.42、帯状角膜変性、虹彩後癒着、視神経乳頭腫脹、黄斑浮腫などが眼合併症として多く見られたとのこと。3 年後には全体として視力は有意に改善し、平均 LogMAR 視力は 0.11 であったが、6 人に 1 人は悪い方の眼の視力が LogMAR 視力 0.4 以上と低視力であったとのこと。治療は約 77% で免疫抑制剤、約 44% で生物学的製剤と日本より免疫抑制剤の使用が多い傾向にある印象を受けました。小児のぶどう膜炎は治療介入により視力の改善は得られるものの視力予後不良の症例も一定数いることが改めて示された論文です。小児は自分から不調を訴えてくれないために診断が遅くなることも多いですが、よりよい視力予後が得られるようさらなる研究が望まれます。

(担当者： 近畿大 岩橋 千春)